

【様式：教研院博 16（共通）】

（A4 判縦、3,000 字以内）

博士學位論文審査の要旨

論文審査担当者

主査	明星大学	教授	廣嶋龍太郎
委員	明星大学	教授	吉富 芳正
委員	明星大学	教授	板野 和彦
委員	日本大学	元教授	小笠原喜康

申請者氏名 貞清 祐介

論文題目 「石川三四郎の教育思想 —「人格の独立」に着目して—」

【論文審査の結果の内容】

本博士学位請求論文は序章、第 1 部 1～3 章、第 2 部 1～3 章、第 3 部 1～2 章、終章で構成されている。序章では本研究の目的と問題の所在を示し、関連分野の先行研究を網羅的かつ包括的に把握した上で、当該研究をその研究動向の中に位置づけた。本論文はまず、既存の石川の教育に関する研究に対して、二つの課題を指摘する。それは第一に、石川の教育に関する研究が 1904（明治 37）年の「小学教師に告ぐ」のみを取り上げて論じられている事が多い点である。そして第二に、石川をキリスト教社会主義者や無政府主義者として一面的に解釈した研究が多いことである。これに対して本論文は、石川という人物の一生涯に焦点を当て、先行研究を踏まえてそれを三つの中心的な思想と活動にわけて論じた。それは、キリスト教社会主義期、「土民生活」思想期、東洋史研究・戦後社会運動期の三期である。

第 1 部では、キリスト教社会主義期における石川の教育思想について、その生涯や思想形成を追い、初期社会主義者やキリスト教社会主義者との関係の中から、その中心的思想「人格の独立」の思想が生まれてきた点を明らかにした。第 2 部では、その「人格の独立」の思想が、ヨーロッパとアフリカへの亡命を通じて、無政府主義的論考に至る過程や思想形成を整理することで、「土民生活」としてさらに確立していった過程を明らかにした。第 3 部では東洋史研究・戦後社会運動期における石川の「人格の独立」教育思想について、古代中国研究を通じた日本人の気質への洞

察や、「共学社」「近代学校」などの教育実践によって追求された点を明らかにした。

本博士学位請求論文は、石川の思想と活動の特徴をキリスト教社会主義期、「土民生活」思想期、東洋史研究・戦後社会運動期の三期に分けて、その中心的教育思想「人格の独立」論へと結実していった過程を論じた点に新規性がある。これにより、それまで断片的に論じられることの多かった石川の思想の形成過程を俯瞰して捉えることが可能となり、「人格の独立」を焦点とした教育思想の形成とそれに基づく実践の諸相を明らかにした学術論文として評価できる。

以上により、本研究論文は博士(教育学)の学位を授与するに十分価値あるものと認める。

【試験及び試問の結果の要旨】

2023年1月27日に博士学位請求論文審査にかかる口頭試問・最終試験を実施した。口頭試問においては、主に以下の点について論文審査担当者から質問や指摘があった。①石川三四郎の教育思想の段階を三期に分けた点について、序論で先行研究を踏まえた上で論文の新規性としての記述を充実させ、結論においても三期に分けたことで得たことを明示する必要があるのではないかと。②結論において石川三四郎の教育思想に関する評価の言及が十分でない。石川の教育思想の評価すべき点と欠点、課題点に言及するとともに、本研究でたどり着いた成果と研究の限界を整理した課題点の書き方をする必要があるのではないかと。③ルクリュに関する引用が十分ではないため、今後発展的に BnF (フランス国立図書館) の Gallica の原典を確認するとよい。④ルソーの思想に関する言及があるが、引用が十分でない。原著の表現を確認して引用する必要があるものを検討してはどうか。⑤海老名との恋愛観の相違については、夫婦関係を前提にした相違ではないかと。⑥石川三四郎の思想の捉え方として、田中らと出会ったことで石川のキリスト教社会主義がどう変化したのか加えてほしい。⑦キリスト教社会主義から離れた石川は、カーペンターと会ってフェビアン協会の影響を受けたが、どのような影響を受けて「土民生活」思想につながっていくのか、結論部の評価を含めてまとめ直してほしい。⑧戦後の日本が個人主義的に変わっていくのを石川がどのように評価するかが十分に論じられていない。とりわけ、「土民生活」思想の概念との関連や、戦前からの武者小路の「新しき村」やヤマギシ会の運動など、農業を基盤とした共同生活をする原始共産主義運動をどのように捉えるかなどについての筆者の見解を示してほしい。⑨石川が大正自由教育運動を批判するのはなぜか。⑩英文タイトルについて、特に「人格の独立」の英訳の意図は何か。⑪石川の東洋史研究に影響を与えた思想は何か。

このような質問を踏まえて、学位申請者は序章と終章を中心とした書き直しを行い、論理的な筋道を明確化するとともに、今後の課題の記述を充実させた。

上述した論文審査、口頭試問、最終試験及び2023年2月10日の博士論文公聴会において慎重に審査した結果、合格と判定した。